

## 物理学 I (力学) 13 回目: 剛体の運動の具体例

中野武雄  
2012年7月3日

### 11回目課題の解答(1a)

フィギュアスケート(ペア)の男子選手(体重60kg)・女子選手(40kg)を、摩擦のない平面上を運動する2質点からなる質点系と考える。いずれもSI単位の値で答えよ。

1. 両者が1m離れて手を繋いでいるとき、重心の位置を求めよ。



A: 男子選手の位置を原点にとると、

$$\vec{r}_G = \frac{m_M \times 0 + m_F \vec{r}_F}{m_M + m_F} = \frac{40[\text{kg}]}{60[\text{kg}] + 40[\text{kg}]} \vec{r}_F = 0.4\vec{r}_F$$

よって男子選手から女子選手へ向かう直線の、男子から0.40[m]の位置。

(なおこの位置は原点の選び方に依存しない)

### 11回目課題の解答(1b)



2. この状態で毎秒1回転しているとき、重心を原点とする全角運動量を求めよ。

A:

男女は重心を中心とする円運動をしている。回転方向は同じはずなので、和を取れば良い。

速度  $|\vec{v}| = r\omega$ 、位置ベクトルと速度ベクトルが直交していることを用いて、 $|\vec{L}| = |\vec{r} \times m\vec{v}| = mr^2\omega$

$$\begin{aligned} |\vec{L}_F| + |\vec{L}_M| &= m_F r_F^2 \omega + m_M r_M^2 \omega = (m_F r_F^2 + m_M r_M^2) \omega \\ &= \{40[\text{kg}] \times (0.60[\text{m}])^2 + 60[\text{kg}] \times (0.40[\text{m}])^2\} \times 2\pi \times 1[\text{s}^{-1}] \\ &= 150.80 \sim 1.5 \times 10^2 [\text{kg m}^2/\text{s}] \end{aligned}$$

### 11回目課題の解答(1c)

3. 両者の距離が1.5mに離れると、毎秒何回転になるか。全角運動量は保存されるとせよ。

A:

重心は4:6内分点だから、 $r_F = 0.90[\text{m}]$ 、 $r_M = 0.60[\text{m}]$ 。

$$|\vec{L}| = (m_F r_F^2 + m_M r_M^2) \omega \quad \text{より、}$$

$$\begin{aligned} \omega &= \frac{150.80[\text{kg m}^2/\text{s}]}{40[\text{kg}] \times (0.90[\text{m}])^2 + 60[\text{kg}] \times (0.60[\text{m}])^2} \\ &= 2.793[\text{rad/s}^{-1}] \end{aligned}$$

毎秒の回転数は  $\omega / 2\pi = 0.444... \sim 0.44[\text{s}^{-1}]$

### 11回目課題の解答(1参考)

この2質点からなる系の重心 回りの慣性モーメント は

$$I = \sum_{i=1}^2 m_i r_i^2$$

互いの距離が1.5倍になると、重心からの距離も

それぞれ1.5倍になる。よってこのとき  $I_{1.5} = (1.5)^2 I_{1.0}$

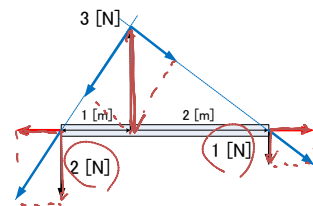
角運動量が保存される 状況では  $I_{1.0} \omega_{1.0} = I_{1.5} \omega_{1.5}$  より

$$\frac{\omega_{1.5}}{\omega_{1.0}} = \frac{I_{1.0}}{I_{1.5}} = \frac{1}{1.5^2}$$

よって回転数は  $1[\text{s}^{-1}] \div 2.25 = 0.44[\text{s}^{-1}]$

### 11回目課題の解答(2a)

棒に作用している以下の3力が、合力も合成トルクもいずれも0であることを作図で示せ。



## 10回目課題の解答(2b)

棒に作用している以下の3力が、合力も合成トルクもいずれも0であることを、適当な座標系を導入して式で示せ。

図のように原点とxy座標系を取る。

$$\vec{r}_1 = (0,0), \quad \vec{K}_1 = (0,-2)[\text{N}]$$

$$\vec{r}_2 = (1,0)[\text{m}], \quad \vec{K}_2 = (0, 3)[\text{N}]$$

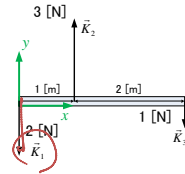
$$\vec{r}_3 = (3,0)[\text{m}], \quad \vec{K}_3 = (0, -1)[\text{N}]$$

だから  $\vec{K}_1 + \vec{K}_2 + \vec{K}_3 = 0$

$$\text{また } \sum_{i=1}^3 \vec{r}_i \times \vec{K}_i = 0 + 3[\text{Nm}] - 3[\text{Nm}] = 0$$

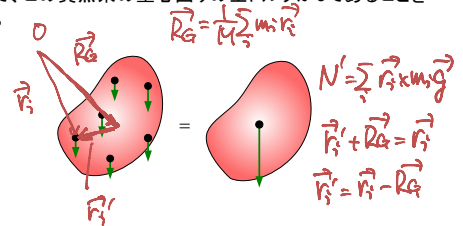
よって合力・合成トルクともに0。

$$N_z = r_x K_y - r_y K_x$$



## 11回目課題 (3)

質点系が一様な重力下にあるとき、すなわち質量  $m_i$ 、座標  $\vec{r}_i$  の質点それぞれに  $m_i \vec{g}$  なる外力が作用している場合について、この質点系の重心回りの全トルクが0であることを示せ。



## 11回目課題の解答(3)

質点系を構成する質量  $m_i$  の質点が  $\vec{r}_i$  にあるとする。

重心ベクトル  $\vec{R}_G$  と、重心からの相対位置ベクトル  $\vec{r}_i'$  は

$$\vec{R}_G = \frac{1}{M} \sum_i m_i \vec{r}_i, \quad \vec{r}_i' = \vec{r}_i - \vec{R}_G$$

ただし  $M = \sum_i m_i$ 。このとき

$$\sum_i m_i \vec{r}_i' = \sum_i m_i (\vec{r}_i - \vec{R}_G) = \sum_i m_i \vec{r}_i - \left( \sum_i m_i \right) \vec{R}_G = 0$$

これを用いて重心回りの全トルクは

$$N'_{\text{tot}} = \sum_i \vec{r}_i' \times m_i \vec{g} = \sum_i m_i \vec{r}_i' \times \vec{g} = \left( \sum_i m_i \vec{r}_i' \right) \times \vec{g} = 0$$

## 今日の内容

- 前回のおさらい
  - 剛体の自由度
  - 剛体の運動の式
  - 慣性モーメント
  - 連続体の慣性モーメント
- 具体的な剛体の運動
  - ちょっとだけ前回の補足(重心・回転半径)
  - 実体振り子
  - 斜面を転がり落ちる円柱
  - 自動車エンジンのトルクと加速度

## 剛体: 特殊な質点系

- 各質点間の距離が常に一定に保たれている質点系
- 剛体の状態の表現に必要な変数の数は:
  - 3次元では 6 個 → 自由度 6
  - 平面運動(2次元)では 3 個 → 自由度 3

## 剛体の運動の式

- 自由度6を、以下のように分配するのが一般的
  - 重心の xyz 座標 (→ 自由度3)
  - x軸、y軸、z軸に平行な軸回りの回転角 (→ 自由度3)

$$M \frac{d^2 \vec{R}_G}{dt^2} = \sum_j \vec{K}_j$$

$$\frac{d\vec{L}}{dt} = \sum_j \vec{N}_j \left( = \sum_j \vec{r}_j \times \vec{K}_j \right)$$

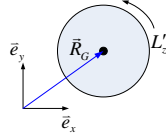
$$\left( \text{あるいは } \frac{d\vec{L}'}{dt} = \sum_j \vec{N}'_j = \sum_j \vec{r}'_j \times \vec{K}_j \right)$$

## 剛体の平面運動の式

$$M \frac{d^2 x_G}{dt^2} = \sum_j X_j$$

$$M \frac{d^2 y_G}{dt^2} = \sum_j Y_j \quad (\text{ただし } \vec{R}_j = X_j \vec{e}_x + Y_j \vec{e}_y)$$

$$\frac{dL'_z}{dt} (= I \frac{d\omega}{dt}) = \sum_j (x'_j Y_j - y'_j X_j)$$



## 慣性モーメント

「z軸回りの慣性モーメント」を

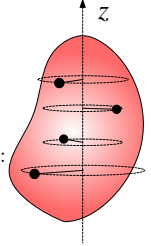
$$I_z \equiv \sum_i m_i \rho_i^2$$

と定義すると角運動量は:

$$L_z = I_z \omega$$

回転による「重心回り」の運動エネルギー:

$$K' = \frac{1}{2} I \omega^2$$



## 連続体の全質量と重心

全質量:

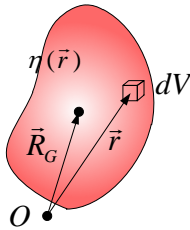
$$M = \sum m_i$$

$$\rightarrow M = \int \eta(\vec{r}) dV$$

重心ベクトル:

$$\vec{R}_G = \frac{1}{M} \sum_i m_i \vec{r}_i$$

$$\rightarrow \vec{R}_G = \frac{1}{M} \int \vec{r} \eta(\vec{r}) dV$$



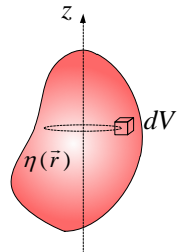
## 連続体の慣性モーメント

慣性モーメント

$$I_z = \sum_i m_i \rho_i^2$$

$$\rightarrow I_z = \int \eta(\vec{r}) \rho^2 dV$$

ただしここでの  $\rho$  は、  
対象の軸から微小体積  
までの距離。



## 慣性モーメントの例

$$I_G = \frac{Ml^2}{12}$$

$$I_G = Ma^2$$

$$I_G = \frac{1}{2} Ma^2$$

$$I_G = \frac{1}{2} Ma^2$$

$$I_G = \frac{2}{5} Ma^2$$

$$I_{GZ} = \frac{1}{2} Ma^2, I_{GR} = \frac{M}{4} a^2 + \frac{M}{12} l^2$$

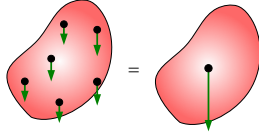
## 剛体: 今日使う定理・補遺

## 剛体に加わる重力の合成

$$\frac{d\vec{P}}{dt} = \sum_{i=1}^N m_i \vec{g} = M\vec{g}$$

$$\frac{d\vec{L}}{dt} = \sum_{i=1}^N \vec{r}_i \times m_i \vec{g} = \sum_{i=1}^N m_i \vec{r}_i \times \vec{g} = M\vec{R}_G \times \vec{g} = \vec{R}_G \times M\vec{g}$$

- 重力下におかれた質点系(剛体)では:
  - 重心に全質量分の重力がかかったと考えてよい
  - 重力による重心回りのトルクは0

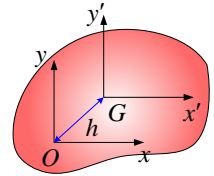


## 平行軸の定理

剛体の重心Gを通る軸の回りの慣性モーメントを $I_G$ とし、その軸に平行で、重心から $h$ だけ離れた軸の回りの慣性モーメントを $I$ とすると、

$$I = I_G + Mh^2$$

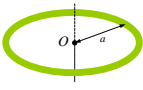
(ただし $M$ は剛体の質量)



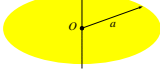
## 慣性モーメントの例



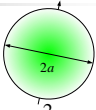
$$I_G = \frac{Ml^2}{12}$$



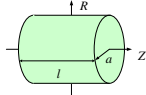
$$I_G = Ma^2$$



$$I_G = \frac{1}{2}Ma^2$$



$$I_G = \frac{2}{5}Ma^2$$



$$I_{Gz} = \frac{1}{2}Ma^2, I_{Gz'} = \frac{M}{4}a^2 + \frac{M}{12}l^2$$

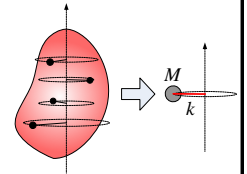
## 補遺: 回転半径

$$I = \sum_k m_k r_k^2$$

ここで

$$I = Mk^2 \quad \left( \text{ただし } M = \sum_k m_k \right)$$

となるように定義した $k$ を「回転半径」と呼ぶ。

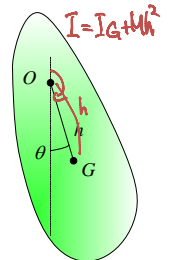


例: 円板 ( $I = \frac{1}{2}Ma^2$ ) なら  $k = \frac{1}{\sqrt{2}}a$ , 球 ( $I = \frac{2}{5}Ma^2$ ) なら  $k = \sqrt{\frac{2}{5}}a$

## 具体的な剛体の運動(1) 実体振り子

## 実体振り子

- 剛体の重心以外に回転軸を固定した振り子
- 自然の位置は OG が鉛直線にある場合
- 角度をずらすと振動をする
  - 周期は?
  - O の位置でどう変わる?



## 運動方程式

O 回りのトルク方程式は (微小振動なら)

$$I \frac{d^2\theta}{dt^2} = \vec{R}_G \times M\vec{g} = -Mgh \sin\theta \sim -Mgh\theta$$

単振り子の運動方程式

$$ml \frac{d^2\theta}{dt^2} = -mg \sin\theta \sim -mg\theta$$

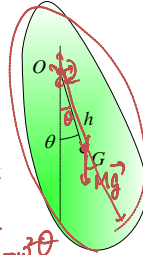
と比較して、振動の解と角振動数・周期は

$$\theta = A \cos(\omega t + \phi)$$

$$\omega = \sqrt{\frac{Mgh}{I}} \Rightarrow T = \frac{2\pi}{\omega} = 2\pi \sqrt{\frac{I}{Mgh}}$$

$$I \frac{d\omega}{dt} = \vec{N}$$

$$\omega = \frac{d\theta}{dt}$$



## 相当単振り子の長さ

$$\omega = \sqrt{\frac{Mgh}{I}}, \quad T = 2\pi \sqrt{\frac{I}{Mgh}}$$

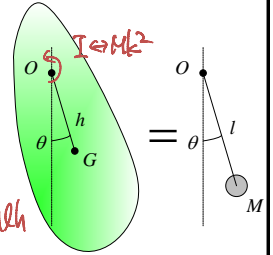
を単振り子の

$$\omega_{sp} = \sqrt{\frac{g}{l}}, \quad T = 2\pi \sqrt{\frac{l}{g}}$$

と比較し、実体振り子に対して

$$l = \frac{I}{Mh} \left( = \frac{k_G^2}{h} \right) \quad I = Ml h$$

を相当単振り子の長さという。



## 参考: 「振動の中心」と振動周期

直線 OG 上の O から l の位置に O' を取り、  
O'G の長さを h' (= l - h) と置く。

平行軸の定理から

$$I = I_G + Mh^2$$

$$I' = I_G + Mh'^2$$

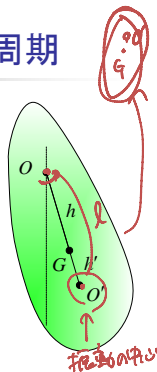
辺々引いて

$$I - I' = M(h^2 - h'^2) = M(h - h')$$

$$\Rightarrow I' = Mlh', \quad I' = \frac{h'}{MI'} = l$$

$$I = Ml h$$

振動の中心



## 参考: 周期を最小にする軸の位置

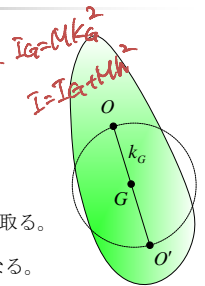
重心回りの角運動量に対応する  
回転半径を  $k_G$  とすると、

$$l = \frac{I}{Mh} = \frac{Mk_G^2 + Mh^2}{Mh} = \frac{k_G^2 + h^2}{h}$$

$$= \frac{(k_G - h)^2}{h} + 2k_G$$

よって  $h = k_G$  のとき  $l$  は最小値  $2k_G$  を取る。

このとき周期  $T = 2\pi \sqrt{\frac{2k_G}{g}}$  も最短となる。



## 具体的な剛体の運動(2) 坂道を転がり降りる円板

## 復習: 斜面の滑降(運動方程式版)

$$ma_x = mg \sin\theta, \quad ma_y = 0$$

$t = 0$  での物体の位置を原点、初速度 0 とすると、

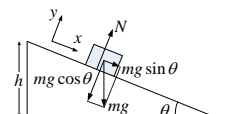
$$\frac{d^2x}{dt^2} = g \sin\theta \Rightarrow v = g \sin\theta t \Rightarrow x = \frac{1}{2} g \sin\theta t^2$$

$y$  は時間によらず 0 で一定。

滑り降りた距離は  $\frac{h}{\sin\theta}$  なので、

$$t_0 = \frac{1}{\sin\theta} \sqrt{\frac{2h}{g}} \quad \text{よって } v = \sqrt{2gh}$$

$$v = g \sin\theta \cdot \frac{1}{\sin\theta} \sqrt{\frac{2h}{g}}$$

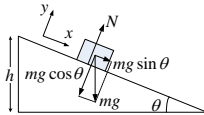


## 復習: 斜面の滑降 (エネルギー保存版)

初期位置における位置エネルギーは  $mgh_0$ 。  
 垂直抗力は束縛力なので仕事をしない。  
 よって力学的エネルギーの保存則から、

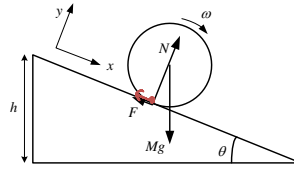
$$mgh = \frac{1}{2}mv^2$$

よって  $v = \sqrt{2gh}$

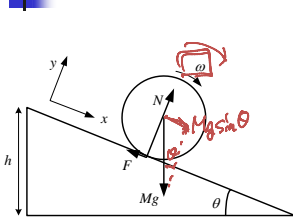


## 坂道を転がり降りる円板

- 滑りなく坂道を転がり降りる円板の運動
  - 円板の質量:  $M$
  - 円板の半径:  $a$
- 円板に働く力
  - 重力 (重心を通る)
  - 垂直抗力 (接点を通る)
  - 摩擦力 (接点を通る)



## 運動方程式



$$M \frac{d^2 x_G}{dt^2} = \sum_j X_j = Mg \sin \theta - F$$

$$M \frac{d^2 y_G}{dt^2} = \sum_j Y_j = N - Mg \cos \theta$$

$$-I \frac{d\omega}{dt} = \sum_j N_j = aF$$

また束縛条件として

$$\frac{dx_G}{dt} = a\omega$$

$$\left( \Rightarrow \frac{d^2 x_G}{dt^2} = a \frac{d\omega}{dt} \right)$$

## 運動方程式 (続)

$$\frac{d^2 x_G}{dt^2} = a \frac{d\omega}{dt}$$

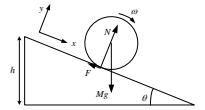
$$M \frac{d^2 x_G}{dt^2} = Mg \sin \theta - F$$

$$I \frac{d\omega}{dt} = aF$$

$$\text{第2式} \Rightarrow \frac{1}{2}Ma^2 \cdot \frac{1}{a} \frac{d^2 x_G}{dt^2} = aF \Rightarrow \frac{1}{2}M \frac{d^2 x_G}{dt^2} = F$$

$F$  を消去すると

$$\frac{3}{2}M \frac{d^2 x_G}{dt^2} = Mg \sin \theta \Rightarrow \frac{d^2 x_G}{dt^2} = \frac{2}{3}g \sin \theta$$



## 運動方程式を解く

$t=0$  で  $x_G=0, \frac{dx_G}{dt}=0$  とすると、

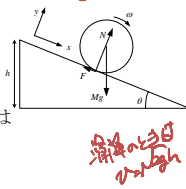
$$\frac{d^2 x_G}{dt^2} = \frac{2}{3}g \sin \theta \Rightarrow x_G(t) = \frac{1}{3}g \sin \theta t^2$$

よって滑り降りるのにかかる時間を  $t_D$  は

$$\frac{1}{3}g \sin \theta t_D^2 = \frac{h}{\sin \theta} \Rightarrow t_D = \sqrt{\frac{3h}{g \sin^2 \theta}}$$

よって斜面下端において

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{重心速度 } v_G = \frac{2}{3}g \sin \theta t_D = 2\sqrt{\frac{gh}{3}} \\ \text{角速度 } \omega = \frac{1}{a} \frac{dx_G}{dt} = \frac{v_G}{a} = \frac{2}{a}\sqrt{\frac{gh}{3}} \end{array} \right.$$



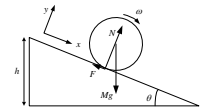
## 参考: エネルギー保存則

質点系の全運動エネルギーは、  
 (重心の運動エネルギー) + (重心回りの運動エネルギー)  
 であった。

$$K = \frac{1}{2}Mv_G^2 + \frac{1}{2}I\omega^2$$

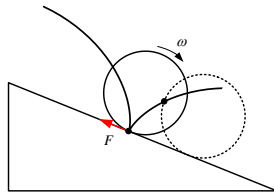
$$= \frac{1}{2}M \left( 2\sqrt{\frac{gh}{3}} \right)^2 + \frac{1}{2} \left( \frac{1}{2}Ma^2 \right) \left( \frac{2}{a}\sqrt{\frac{gh}{3}} \right)^2$$

$$= \frac{2}{3}Mgh + \frac{1}{3}Mgh = Mgh$$



## 余談: 摩擦力による仕事は?

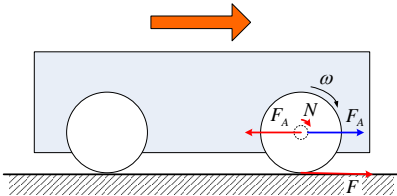
- 円板の外周に置いた「質点」は、サイクロイドと呼ばれる運動をする。
- これは斜面との接触点では、斜面に垂直な方向に運動する。
- よって摩擦力と接触点での質点の運動は直交 → 内積がゼロなので仕事をしない



## 具体的な剛体の運動(3) 自動車のトルクと加速度

## 自動車のトルクと加速度

- 前輪・後輪に同じトルク  $N$
- 車体質量  $M$
- 車輪の質量  $m$ , 半径  $a$



## 運動方程式

車体:

$$M \frac{dV}{dt} = 2F_A$$

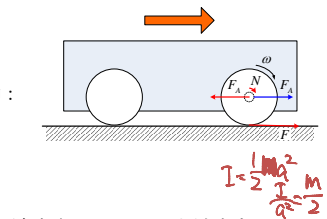
車輪の並進・回転運動:

$$m \frac{dV}{dt} = F - F_A$$

$$I \frac{d\omega}{dt} = N - aF$$

束縛条件:

$$V = a\omega$$



連立させて  $F, F_A, \omega$  を消去すると:

$$\left(m + \frac{M}{2} + \frac{I}{a^2}\right) \frac{dV}{dt} = \frac{N}{a}$$

## 実際の車での例

$$\frac{dV}{dt} = \frac{N}{a \left(\frac{3}{2}m + \frac{M}{2}\right)} = \frac{2N}{a(3m + M)}$$

$$\sim \frac{100[\text{Nm}] \times 8}{0.3[\text{m}] \times 1100[\text{kg}]} = 2.4[\text{m/s}^2]$$

- 例: 日産ティーダラティオ
  - 最大トルク: 148 [Nm] (@4400 rpm)
  - ギヤ比:  $5.473 \times (2.561 \sim 0.427)$
  - 車重: 1100 [kg]
  - タイヤ半径: 0.3 [m]

## 余談: ギヤ比とトルク

ギヤ比: 2つの歯車の外周の比 → 半径の比

2つの歯車を作用させると作用反作用の法則が成立するから、 $F_{12} = -F_{21}$

$$\text{このとき } |N_2| = r_2 |F_{21}| = \frac{r_2}{r_1} |F_{12}| = \frac{r_2}{r_1} |N_1|$$

よってギヤ比が大きいとトルクは増大 (ただし回転数は落ちる)

